earth / universe

16-02 (universe - yellow seed)　175.5×237.5cm 綿キャンバスにテンペラ・油彩 2016 年

小林俊介展

2016.11.11 Fri - 12.13 Tue

11.12 Sat 14:00 - アーティストトーク

最上川美術館
真下慶治記念館

MUSEUM

〒995-0054 山形県村山市大字大淀 1084-1　TEL 0237-52-3195　FAX 0237-55-2152 http://www.massimo-k.org

開館時間　9:00 -17:00（入館は 16:30 まで）　休館日　水曜日　入館料　大人 300 円　小・中学生 150 円

earth / universe によせて　　小林俊介

手製のパネルに綿布を張り、テンペラ（卵で顔料を溶いた絵具）を塗り広げていく現在の描画方法になってから 20 年ほどになる。基底材や下地を自製するのは経済的な理由もあるが、望みの色艶を得るには油彩のみでは粘りや艶があり過ぎ、また自在に塗り広げるのが難しく、一方水彩や膠彩のみではつや消しであり過ぎるからである。合成樹脂塗料は便利だがビニールのような質感になりやすいし、顔料の濃度が薄く感じられる。さりとて、テンペラで望みの色艶を実現するのは容易ではなく、膠による目止めやニスによる絶縁という作業が必要で、そこに多大な労力を費やすことになる。ただそれは高橋由一らの初期洋画においても取られた方法であり、ロスコも膠塗りをしてキャンバスを自製していた。望みの効果を得るためのこだわりからであろう。

円形や楕円形、変形のパネルを作り始めたのは震災以降、2014 年頃からである。2000 年頃の私の作品には既にキャンバスの淵に円弧が現れていた。2005 年頃からの色面的な仕事では、矩形のキャンバスの四隅が「塗ることができない」空隙となっていた。もちろん、キャンバスの四隅を取ったところで、すべての問題が解決するわけではない。指摘されていることだが、描こうとする視野＝色彩の広がりとキャンバスの限界は必ずしも一致しないからである。それでも、矩形のキャンバスより描いていてしっくりとするのは、描く行為＝身体のリズムに有機的なキャンバスの形の方が私には馴染みやすいからであろう。アルプや菅沼碌氏らのような先達の仕事に対する尊敬もある。しかし、望みの色艶を得るための悶絶格闘は同じであり、円や楕円のパネルを自製するのは矩形よりも多くの手間と労力を要する。

円や楕円形の下地に描くことで起きた変化のひとつに、自身の制作と大地や自然、世界に対する「つながり」をより強く意識するようになったということがある。earth / universe という命名は、円や楕円という地球や世界地図を思わせる形態から連想されたもので、直感的なものではあったが、ある種の必然性があったように思える。この世において重要なことはごく僅かであり、自らことを起こすというより自ずからなされるようなことが重要であるという理念が、作品に具体化されつつあるように感じるからであろう。もちろん、それは単に状況に流されるということではなく、より大きな合理性＝自然の秩序のなかに身をおくということである。古代の中国人はそれを「道」と呼んだのであろう。

山形という地域に暮らしていると、自ずから第 1 次産業の現状が憂慮される。たとえば、肥料や農薬の過多、F1 種の問題など、計画の論理の元に置かれた農業は、我々の心身はもとより、大地＝地球を危機的な状況に追い込んでいる。そもそも農林水産漁業を「産業」にしてしまった文明が誤りだったのであろう。芸術や宗教もまた然り。我々は自然との互酬的な関係を回復することができるのであろうか。

朱（硫化水銀）や鉛白といった古典的な顔料を溶いていると、自ずから中世の錬金術に思いを馳せることになる。鉱物、動植物、自然界の全てのものに対する作法を崩壊させてきたのがグレゴリオ暦以降の地球の歴史であった。我々は古代マヤ人が感覚していたような宇宙の秩序（cosmos）に再び参画することができるのであろうか。（2016.9.11）

小林俊介展　earth / universe

参考：《01-05（間ー揺らぎ）》2001 年

参考：左から《05-43blgl》《05-42wgl》　府中市美術館の展示風景　2005 年

左から《14-01（earth - blue storm）》
《15-10（earth - yellow star）》

アーティスト近影

小林　俊介　（KOBAYASHI Shunsuke）
1966 年　東京都生まれ
1996 年　筑波大学大学院博士課程芸術学研究科修了
1997 年　山形大学教育文化学部専任講師
現在　　山形大学地域教育文化学部教授

個展
ギャラリー美遊（東京、1994 年）
川越画廊（埼玉、1997 年、1999 年）
山交ホーム OM ソーラーモデルハウス（山形、2001 年）
村松画廊（東京、2001 年、2003 年、2005 年）
ヒルサイドギャラリー（東京、2002 年）
ぎゃるり葦（山形、2003 年）
白鷹町文化交流センターあゆーむ（山形、2010 年）
最上川美術館・真下慶治記念館（山形、2016 年）

主なグループ展
第 22 回現代日本美術展（東京都美術館、1993 年）
第 4 回柏市文化フォーラム 104 大賞展（柏市民会館、1993 年）
アート・ラブ（つくば美術館、1994 年）
第 25 回現代日本美術展（東京都美術館、1996 年）
VOCA' 97（上野の森美術館、1997 年）
やまがた花咲かフェア' 02（最上中央公園、2002 年）
出会いと対話 — dialogue —（宮城県美術館県民ギャラリー、2004 年）
VOCA 展 2004（上野の森美術館、2004 年）
絵画の行方ー現代美術の美しさって何ー（府中市美術館、2005 年）
街かど美術館　アート@土澤（岩手県花巻市東和町土沢商店街、2006 年）
紙の仕事／鈴木隆、今澤正、小林俊介、舟越直木（GALLERY TERASHITA、2010 年）
生まれるイメージ 2010（山形美術館、2010 年）